

又、市域内は、合併前の村界で熱海地区と他の5地区に分けられるが、各地区は、観光産業の発達につれ、泉・伊豆山の連続した観光地化、南熱海・初島の独自の観光資本導入、多賀の住宅地化と地域差を生じている。

人口移動から、更に広い地域構造をみると、隣接する伊東・沼津・小田原から通勤者を吸引し、東京には吸引されている。流出人口においても京浜との入替が目立つが、観光客は全国的規模で吸引している。物資の流通が江戸時代から東京に依存していることを考えると、熱海市と大都市東京との密接な関連がわかる。

## 武蔵野台地北東部の地理学的研究 —— 三富新田を中心として ——

坂 卷 郁 子

武蔵野台地北東部の集落の多くは、江戸時代以降の開発による新田集落である。三富新田は、土地割規模などからみて、その中でも最も典型的と言える。江戸時代に開拓されるまでは、周辺古村の秣場となっていたのであるが、長い間無居住地域として残された最も大きな理由の1つに、台地上にあり、水が得にくかったことがあげられる。

三富地区は、台地北東部のほぼ中央に位置するが、この地区の大きな特徴として、新田集落であるということと、首都周辺地域に存在しているということの2つをあげることができると思う。現在の三富地区を外観から判断するならば、屋敷林に囲まれた茅ぶきの家屋、その背後の耕地、畦畔の茶の樹そして山林と、新田開発時代の面影を強く残す純農村地域である。台地北東部は、首都周辺地域に位置するという条件のもとに、最近著しい変容を遂げている。ことに東武東上線、西武新宿線など私鉄沿線の大型団地造成や分譲地、分譲住宅の進出には目ざましいものがある。また工場の進出、商店の増加もみられる。その結果、台地北東部の市町村には、急激な人口増加、産業構造の変化などがみられる。このような中であって三富地区は、景観的には、純農村地域という特徴を強くもち、三富地区周辺の鉄道沿線の変容とは、著しい対照をなし、新田開発以後、わずかな変化しか起きていないとさえみえる。しかしながら、農家の聴き取り調査およびアンケート調査により、農家内に質的な変化が起きていることがはっきりした。雑穀中心から野菜中心へと、栽培作物に変化がみられる他に、農家の経営形態にも変化がみられる。「穀類中心+茶+家畜」という新田開発時代の経営形態から変化したと思われる「野菜中心+茶+家畜」という経営形態が現在のところ大部分を占めるものの、最近の他産業のめざましい発展の中であって、最も効率的な商品生産農業を行なうべく、作目選択の必要にせまられていること、最近人手不足が目立っていることなどから、野菜・茶・家畜のいずれかを選択し、単一部門的経営を行ない、経営の合理化をはかるといふ動きがみえ始めている。また、これとは対照的に、家計維持の経営にとどまり、耕作は最低限にとどめ、土地の値上がりを待つという農家も存在する。また、三富地区の現在の

「多い農家人口」は、「多い農業従事者」を意味するのではなく、農家内の「多い非農業従事者」を意味している。

新田開発時代には、三富新田が周辺地域に強い影響を与えたが、現在は、三富地区をとり囲む鉄道沿線の周辺地域から強い影響をうけている。現在のところ顕著なのは、農家内の質的变化であるが、近い将来三富地区が景観的にも全く変容することが十分考えられる。大型住宅団地の造成がきっかけとなり、純農村から、東京への通勤住宅都市へと著しい変容を遂げた福岡町の例は、三富地区の今後の変容を考える上で、参考になると思う。

## 茨城県古河市の地理学的考察

山口 とも子

卒業論文として調査・考察を行った地域は、茨城県西端の古河市である。関東平野のほぼ中央に位置する古河市は、人口約5万人、面積21.03km<sup>2</sup>の小規模な地方都市である。しかし歴史の古いこの都市は、古くから経済・文化の中心地であるが、近年東京の勢力圏の増大とともに、東京圏の一都市となりつつある。

このたびの考察は、自然のおよび歴史的基盤の上に、今日の古河市の都市機能の現状を調査することを目的とし、主に東京の勢力がそれらにおよぼす影響に注目した。

古河市は、戦前まで茨城県でも屈指の工業都市であったが、今日の主な機能は商業である。従って、商業機能から、この地方のnodal regionとしての性格の把握と、また東京商圏の影響を考察のpointとした。

研究対象は、古河市域にみられる自然・人文のすべての事象としたが、自然環境、歴史的背景は、市の発達の基盤として略述するにとどめた。

古河市は、関東構造盆地底付近に位置しているが、北からのびる台地上に位置しており、その土地の生産性は低い。南を利根川、西を渡良瀬川に境されているが、台地上に位置するためそれらの河川の洪水が古河市に及ぼす影響は少なかったが、水上交通の面で、市の発達に大いに貢献した。しかし今日では、この両河川は、交通の支障となっている。

歴史をふりかえると、15c半～16c末にかけての公方時代が最も盛えた時期であり、当時の古河は関東の政治・文化の中心であった。江戸時代に利根川の改修が行われ、その結果、今日のような河川に囲まれた土地となり、古河の勢力圏は縮小された。しかし河岸場として、また奥州街道の宿場として盛え、明治になると、製糸業が興り、その隆盛は、第2次大戦まで続いた。

このような基盤を明確にする一方、市の構造を、土地利用の形態、人口密度、建築率により明らかにし、主なテーマとする、市の機能の考察の導入とした。

今日の古河市は、人口においては、北関東的性格からの脱皮すなわち着実な人口増加がみられたが、